

第四三六回 青葉会 令和四年八月二十五日(木)(於…三軒茶屋 区施設しやれなあと)

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵

佐藤ただしげ 西澤國護 長谷見びん 星田啓子 山崎亜也

投句・選句

小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 福島正明

選句のみ

古田昇 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄
伊賀山そらお 熊谷國男(くにお…新人) 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子
高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

十五点 ◎夜深く足袋の白さや風の盆 けい子 (孤・く・○た・○孝・恵・敏・康・
雅・○允・正・啓・規・亜・○三・盛)

十四点 ◎ベース掃く球審の背に西日濃し 康敏 (○そ・紀・忠・孤・五・健・千・恵・
敏・び・昇・○啓・亜・天)

十一點 ◎炎帝の寝そべる路や犬の舌 啓子 (紀・孤・く・○五・○千・た・清・
け・亜・三・盛)

十点 繰り言は言はぬ祖母なり白緋 とみ子 (紀・忠・○く・五・○恵・康・允・
○正・昇・天)

七点 大まかにピザ切り分けて浜の秋 びん (そ・紀・五・と・隆・正・亜)
◎一陣の風に暦の秋を知る 啓子 (紀・孤・た・孝・敏・國・允)

六点 かなかなや釈迦堂口の切通し 康敏 (紀・く・ゆ・清・敏・啓)
宇奈月の湯宿寂びれて河鹿笛 びん (そ・紀・健・恵・昇・三)

◎悲しみの川染めてゆく流灯会 昇 (そ・紀・忠・孤・た・國)

五点 ◎俳の一つ一つへ芋殻焚く 堂哉 (忠・孤・く・○と・允)

絵日記を描き終へ子等の夏終る 忠彦 (紀・た・清・び・允)

華やげり向日葵墓に手向ければ 千恵 (紀・雅・び・け・盛)

境内にコーラス響く墓掃除 全 (そ・紀・健・と・康)

◎言ふなればみんなみん蝉は鼻づまり 恵洲 (紀・孤・と・正・啓)

椎の木の根元に数多蟬の穴 啓子 (紀・五・ゆ・雅・規)

◎広島にあの日あの時夏の雲 忠彦 (紀・孤・敏・ゆ・昇)

四点 一日でたたむ夕べの木槿かな 忠彦 (紀・孝・ゆ・三)

空港の展望デッキ翹雲 孤舟 (昇・清・規・天)

◎ゆさゆさと茂りの動く熊の鈴 とみ子 (紀・孤・千・亜)

ツリーハウス西瓜上げよとメモ下りる 全 (紀・健・康・昇)

白雨くる土と樹々の香連れており
◎砂浜に傾ぐ破船や赤とんぼ

竹竿に「囀」の旗や鮎の里
かなかなや人の命の寂しさよ
かなかなに気づく瞬間季（とき）移る
とんぼうの背（せな）を眺むる我が身かな
秋めいて髪すくお岩玉三郎

千恵（紀・孝・ゆ・龍）
康敏（紀・孤・恵・規）
びん（紀・恵・啓・三）
規雄（紀・敏・雅・天）
亜也（紀・と・孝・び）
全（紀・隆・雅・盛）
けい子（紀・忠・清・正）

三点

初秋や散髪すませ句会の座
新涼の湖畔に上る間歌泉
百日紅変はらぬ日々と人と言ふ
思ひ立ち独りで行きし墓参り
能楽堂に小方見事に日焼けをり
盆僧の孫の自慢をひとくさり
無意味なる格好つける終戦日
平和の火ゆらぎを囲む蟬時雨
プーチン君戦争お止め原爆忌

紀久男（康・隆・盛）
孤舟（紀・千・龍）
五郎太（紀・忠・び）
全（紀・孝・規）
とみ子（紀・亜・三）
堂哉（龍・隆・允）
正明（紀・龍・け）
啓子（紀・そ・〇盛）
天牛（紀・敏・け）

二点

水澄むや発句せむとて句帳持ち
長崎に今日も鐘鳴る原爆忌
朝顔や蔓に咲く花萎む花
台風や帆柱きしむ船だまり

紀久男（健・啓）
忠彦（紀・た）
全（敏・雅）
孤舟（五・規）

ロミーシュナイダー映画祭

秋立つや青き眼に見つめられ
猛暑から一転すさまじ最上川
見渡せば小雨烟るや定家の忌
雨上がり歌うがごとく百合開く
街静かうなぎ屋だけに行列が
高原の宿に無数の螢灯が
物事は樂觀的に百日紅
山椒の実煮てのんびりと日の暮れて
老夫婦土用鰻は到来もん
破れ垣のこれも埋草藪からし
「終活の手引書」難儀ちちろ鳴く

五郎太（紀・隆）
ただしげ（紀・龍）
全（紀・龍）
雅夫（紀・け）
國護（紀・く）
全（紀・敏）
正明（紀・天）
けい子（紀・天）
天牛（紀・天）
亜也（紀・國）
盛雄（紀・啓）
全（紀・健）

一点

猿之助の「浮世風呂」(歌舞伎座)
三助の洒脱な踊りすつきりと
右近の「累」(国立劇場)

紀久男（正）

冷まじき殺し場無残喝采浴ぶ
点在の麦稈ロール蟻蛸跳ぶ
秋夕焼ゴルフボールの抛物線
シャワー浴び髭を当たりて夕べ来る

全（け）
孤舟（康）
全（紀）
五郎太（紀）

白芙蓉話は墓や六代目

全 (紀)

目の前に雲生(あ)るるさま避暑の宿

とみ子 (紀)

かの戦火早や半年か秋暑し

健介 (千)

絶えることなき雌滝の水と音

全 (紀)

なつかしき切子皿出し夜の膳

千恵 (紀)

やつと聞くせみの鳴き声雨の後

ただしげ (隆)

何をする気も失せかねる大暑かな

全 (紀)

燃える紅色鮮やかに終戦日

全 (ゆ)

先々帝の声を今年も敗戦忌

恵洲 (と)

アロハシヤツ胸をはだけて2盃目を

國護 (紀)

眠たきをメディアアの揺する敗戦忌

びん (紀)

広島の墓参たつぷり水掛くる

昇 (千)

秋立てば明け染む刻の遅くなり

啓子 (び)

ひぐらしの声聞き又も涙かな

規雄 (紀)

それぞれに旧りし家々垣木権

亜也 (紀)

生身魂は稚に低頭笑み交わす

盛雄 (紀)

※※※※※

【句評】

十五点句

夜深く足袋の白さや風の盆

けい子

※が付き一字下げたコメントは、採ってはいないものの、気になる点を記した句です。

孤舟さん・・・「風の盆」の素材は、「風」「胡弓」「月」「酔芙蓉」「本門寺」あた

りだが、「足袋の白さ」に目を付けたのは手柄。なお、冬の季語「足袋」の本意は「防寒」。

くにおさん・・・八尾の風の盆。越中おわら節に合せて踊る。夜も更けて踊りは最高潮。踊り手の足袋の白さが一層際立って来る。胡弓の嫋々とした音色が耳元に聞こえてくるようだ。

ただしげさん・・・中七の表現で風の盆の静けさとその雰囲気が伝わってくる様です。恵洲さん・・・風の盆を実際に見たことはありませんが、夜目にも白く映える白足袋が、ゆかしいですね。夜祭の風の盆の雰囲気を伝えているように思えます。夜深く、の措辞もいいです。

孝岳さん・・・深夜まで無言で踊る踊り手達の艶やかな優雅さを暗闇の中の「足袋の白さ」でうまく表現している。哀切を帯びた胡弓の調べも聞こえてくるようです。

康敏さん・・・風の盆の夜を徹しての踊り、薄暗さに白足袋が印象的だ。今年は三年振りで縮小して6月1日より行われる予定。今年の風の盆の佳句を又期待したい。

允章さん・・・随分昔、青葉会の吟行旅行で八尾のおはらまつりへ連れて行ってもらったことを思い出した。夜を徹して踊り歩く男女の列、「足袋の白さ」の措辞が幽玄なおはら踊りの姿を浮かびあがらせている。

亜也さん・・・胡弓の音など聴覚ではなく、視覚で夜の深さを捉えて秀逸。

※五郎太さん・・・もう十年ほど前でしょうか、青葉会で八尾に吟行しました。なんとも雰囲気のある盆踊りでした。

句会では、予選でとりましたが、季重ねのような気がして、迷っ

たあげくに落としました。ここはいわゆる夏足袋、冬の季語になる防寒用のものではないのでいいのだそうです。
※紀久男……残念ながら季重なり。

十四点句 ベース掃く球審の背に西日濃し

康敏

孤舟さん……甲子園の主審は重いプロテクターに身を包み、汗だく。追い打ちをかけて背中にジリジリと西日が照り付ける。

千恵さん……私の愛してやまない野球の句ですね。これは甲子園全国高校野球大会の第三試合の光景とみました。審判はボランティアです。汗をふきふきプロテクターをつけベースを綺麗に掃く姿は見慣れてますがこんな句にされて佳い句だと思いました。

恵洲さん……草野球のグラウンドの景か。残暑の西日中、暑そう。ホームベースの後から西日が射しているのだとしたら投手は眩しいだろうなあ。

啓子さん……夏の高校野球第三試合。陽は傾くも容赦なく照り付けている。『球審の背に』で、今日の最後の試合も無事にこのベースを蹴って踏んで青春を刻んでほしいと、被った泥を掃く球審の願いまで感じられませぬ。

亜也さん……球児などではなく球審に着目したことの功。映像が目には浮かびます。天牛さん……このような句を詠んだ人はいるでしょうか。

十一點句 炎帝の寝そべる路や犬の舌

啓子

孤舟さん……短足のワンちゃんにとって、焼けたアスファルトの道路は耐えられない。

くにおさん……炎天の路傍に犬が舌を出し、はあはあと息をしている。鎖に繋がれた犬はなにもできない。「炎帝」は夏の傍題で、夏を司る古代中国の神の名。実に滑稽味のある一句。作者は炎暑に喘ぐ犬を憐れんでいるのである。

五郎太さん……私も先月意味がちよっと不明な、似たような句を出しました。こちらの句は暑さに喘ぐ犬を持つてきたので生き生きとしました。

千恵さん……地球上にドカツと居座っている炎帝ですが、ふと目を路上に移すとそこには大きな犬も暑くて舌を出している光景がさもありなんと感じました。大きな視野から小さな「犬の舌」まで視点がフォーカスされて行くのがとても佳いと思いました。「犬の舌」いいですねえ。ただしげさん・真夏の厳しい暑さを路地で休んでいる犬を通じて、巧みに表現している。

亜也さん……寝そべらせる発想が面白い。

十点句

繰り言は言はぬ祖母なり白緋

とみ子

くにおさん……おばあさんはやたらと愚痴は申しませんが、と作者は確信している。「白緋」という措辞で潔くシャキツとしたおばあさんであることが想像できる。「白緋」で涼しさも感じられる。句姿も凜としている。

恵洲さん……立ち居振る舞いがきちんとして、性格も毅然として潔い老女の佛が⁴

白緋によく映えて、目に見えるようです。

康敏さん・・・愚癡など零さず、毅然とした老婦人が眼に浮かぶ。季語の白緋が涼しげで、効果的だ。

正明さん・・・品がある。隠せないものとはその人の品の質。きちんとした老人に脱帽。

天牛さん・・・緋で如何にも祖母らしいですね

紀久男さん・・・私は祖母さん子でした。青山に独り住まいの祖母と毎週芝居観に東横ホールや歌舞伎座等へ。食事は赤坂飯店本店か松坂屋店、銀座の中華第一楼。明治生まれの気骨のある人で、長火鉢に煙管で格好よかったです。周りの人に睨みを利かせておりました。肝臓癌で亡くなった時、通夜で添い寝した事を憶えております。

七点句

大まかにピザ切り分けて浜の秋

びん

隆さん・・・浜焼と同じく、浜辺での食事は楽しさ優先。上五に雰囲気が現れている。「浜の秋」より「浜の夏」がいい。
亜也さん・・・「大まかに」が野外の気分を伝えて絶妙。

六点句

かなかなや釈迦堂口の切通し

康敏

くにおさん・・・鎌倉での一句。作者は釈迦堂口の切通に來ている。鬱蒼とした木立の中で聴く蝸のこえに作者の心は自然と「武士の都鎌倉」に思いを馳せた。蝸は深い森や林を好み、そのこえはもの悲しくいかにも秋の鎌倉に相応しい。

ゆたかさん・・・情景が目瞼に浮かびます。

啓子さん・・・かなかなが鳴けば秋、それでも散策にはまだ暑い時期ですが、独特な釈迦堂口の切通しの前に佇ち、刻と季節の過ぎ行く様に想いを馳せる作者の姿が思い浮かぶようです。

宇奈月の湯宿寂びれて河鹿笛

びん

恵洲さん・・・この温泉、未訪ですが、寂びれた温泉宿にせせらぎあつて、そこから寂しい河鹿の声が聞こえてくる感じは、デジャヴュの感強く、雰囲気分かります。

悲しみの川染めてゆく流灯会

昇

孤舟さん・・・ひとつひとつの灯籠に亡き人への思いが込められている。

ただしげさん・・・灯籠流しの寂しい・哀しい気持ちをうまく詠んでおられる。

紀久男さん・・・上五、中七への句頭がㄨの音で韻を踏んでいます。

一陣の風に曆の秋を知る

啓子

孤舟さん・・・確かに季節の変わり目は、接する風の趣きで左右される。

ただしげさん・・・暑さが続いていてもふとした時の風に、曆の上ではもう秋だと感じさせることを上手く詠んでいる。

五点句

佛の二つ二つへ芋殻焚く

堂哉

孤舟さん・・・この歳になると先に見送った人は多い。ひとりひとりの面影を辿りつつ迎え火を焚く。

くにおさん・・・盆の十三日、祖霊を迎えるため玄関前に芋殻を焚く。「迎火」である。作者は故人一人一人の面影を胸に懇ろに芋殻を焚き霊を迎えたのである。お盆の夕方見られる光景であるが、昨今の街中では余り見られなくなった。

とみ子さん・・・優しいお心にしみじみとした情緒を感じました。
絵日記を描き終へ子等の夏終る 忠彦

ただしげさん・・・夏休みの終わりが近い時期、宿題に対する親の感じが見て取れる。
境内にコーラス響く墓掃除 千恵

康敏さん・・・私は仏教系の幼稚園に通っていた。併設の保母養成所のお姉さん達の歌声が隣のお寺の境内まで届いていた。今日はお盆なので特別に本堂でコーラスを披露しているところか。

言ふなればみんなみん蝉は鼻づまり 恵洲
孤舟さん・・・将に言い得て妙。改めて私も鼻をつまんで「ミーンミーンミーン」と鳴いてみた。

とみ子さん・・・これは発見ですね。確かにと思います。笑いました。

啓子さん・・・確かに!! みーんみんと声色すれば鼻濁音(笑) 落語・川柳の気配。
椎の木の根元に数多蟬の穴 啓子

ゆたかさん・・・観察眼が鋭いです。

広島にあの日あの時夏の雲 忠彦

孤舟さん・・・昭和20年8月6日午前8時15分。キノコ雲が市街を覆った。
ゆたかさん・・・夏の雲に原爆雲を想起します。

昇さん・・・私の実家は爆心地から徒歩10分です。団塊世代で被爆はしていませんが、原爆の惨状を聞かされ、原爆の瓦礫の残る環境の中で育ちました。積乱雲を見ると原爆のキノコ雲を思い浮かべます。
私にとって8月6日は特別な日です。

四点句

空港の展望デッキ翳雲

孤舟

天牛さん・・・旧い羽田空港のデッキを思い出しました。

ゆさゆさと茂りの動く熊の鈴

とみ子

孤舟さん・・・「熊出没注意」の立看板に逢い戦いた覚えあり。「ゆさゆさと」がその恐怖感を的確に表現している。

亜也さん・・・結構恐怖のシチュエーション。

ツリーハウス西瓜上げよとメモ下りる とみ子

康敏さん・・・映画『スタンド・バイ・ミー』の樹上の小屋「秘密基地」が思い出される。少年時代の回想であろうか。

白雨くる土と樹々の香連れており 千恵

ゆたかさん・・・夏日に乾いた土が夕立で匂いを発する瞬間を捉えた感覚が素晴らしいです。

龍平さん・・・音が微かな季節の香りを運んで来る 蓋し名句。

砂浜に傾ぐ破船や赤とんぼ

康敏

孤舟さん・・・横田めぐみさんが拉致された新潟の海岸に、北朝鮮の工作船が漂着したことが思い出されます。「赤とんぼ」がめぐみさんの望郷の

念を象徴している。

惠洲さん・・・これも、既視感のある句。砂浜に打ち捨てられた船の残骸にも赤とんぼはとまる。死と生の対比と言ったら大袈裟か？

竹竿に「囿」の旗や鮎の里

びん

惠洲さん・・・アユ釣りの名所の景。釣りには詳しくありませんが、所謂友釣り用の囿の鮎を売る店があるのですね。釣りを知らない者から見ると、ある意味物騒な「囿」一字の旗はユーモラスでもあります。

かなかなに気づく瞬間季（とき）移る

亜也

とみ子さん・・・蟬のなかでもかなかなは特別です。夏の終わりを気付かせてくれます。

とんぼうの背（せな）を眺むる我が身かな

亜也

隆さん・・・トンボの痩せ細った背を眺むる人は稀有な人。飛ぶのには機能的なスタイルでしょう。

三点句

初秋や散髪すませ句会の座

紀久男

康敏さん・・・この二ヶ月猛暑とコロナ七波のため自粛生活をしていたので、髪は伸び放題でぼっさぼさ。作者はもつと几帳面と思うが…。初秋と散髪後のさっぱり感が調和している。

隆さん・・・散髪で気分転換できる。いい句ができたでしょう。

「新涼や散髪すませ句会ゆく」でも。

一日でたたむ夕べの木槿かな

忠彦

ゆたかさん・・・木槿の特徴を捉えた表現が見事です。

新涼の湖畔に上る間歌泉

孤舟

紀久男・・・信州は諏訪湖の景でしょうか、懐かしい大景です。

能楽堂に小方見事に日焼けをり

とみ子

亜也さん・・・堅苦しい会ではないことも言外にあり？

紀久男・・・夏の終わりごろ、冴えない大人の中に子どもの日焼けした健康な顔や手がひときわ目立つ。上手く句に詠まれたベテランの作品です。

盆僧の孫の自慢をひとくさり

堂哉

隆さん・・・「他人の自慢話を聞きたい人はいない。失敗談、人に言えない恥ずかしい話が人の心に響くのである…」(山下惣一 著書より) 目に映る法事の佳句ですな。

無意味なる格好つける終戦日

正明

龍平さん・・・同感!!

かなかなや人の命の寂しさよ

規雄

天牛さん・・・余計なことは云はずに人の命がきいています。

二点句

長崎に今日も鐘鳴る原爆忌

忠彦

ただしげさん・・・少々不謹慎かもしれませんが、戦後流行った藤山一郎の「長崎の鐘」を思い出しました。

朝顔や蔓に咲く花菱む花

忠彦

※康敏さん・・・切字の用法について。上五を切字「や」で切った場合、中七・

下五は上五と関係ない内容にするのが俳句の定石と云われ、二物
衝撃或いは二句一章というようです。例えば「朝顔や役者の家は
まだ覚めず 川崎展宏」。御句は一物仕立（一句一章）と見ますの
で「朝顔の蔓に咲く花萎む花」でいかがでしょうか。

台風や帆柱きしむ船だまり

孤舟

五郎太さん・ヨットか練習用の帆船でしょうか。風やら雨やらが強まり、マスト
もカタカタと、ギーギーとなり、様々な音が聞こえてきます。

ロミーシュナイダー映画祭

秋立つや青き眼に見つめられ

五郎太

隆さん・見つめ合うということもなくなつた。映画監督のサービス精神に乾杯。

猛暑から一転すさまじ最上川

ただしげ

龍平さん・山形県に降る雨は一粒残らず最上川にそそぐ一冬も来てケラッシャ
イ（下さい）一 茂吉は詠んだ「最上川逆白波の立つまでに吹雪く
ゆふべとなりけるかも」 若い頃なら「雪が降る貴女は来ない」の
アダモも良かった。

街静かうなぎ屋だけに行列が

國護

くにおさん・土用の丑の日だろうか。炎天の街中は人影がなく静まり返ってい
る。ただ、老舗のうなぎ屋だけは鰻を食べようと人が行列をなし
ている。熱風に乗って香ばしい匂いが漂う。この句、語順を逆に
したらどうだろうか。

物事は楽観的に百日紅

正明

天牛さん・つるりとした幹の百日紅がきいていますね。

山椒の実煮てのんびりと日の暮れて

けい子

天牛さん・江戸の下町の風情がはつきり出ていますね。

「終活の手引書」難儀ちちろ鳴く

盛雄

健介さん・終活の手引ってさぞかし難義でしょうねえ。でも、やっぱり、
終活って必要なんでしょうねえ。

一点

点在の麦稈ロール 蟋蟀跳ぶ

孤舟

康敏さん・収穫後の麦畑のあちこちに転がる巨大な麦稈ロール。牛馬の敷き藁
や飼料になる。雄大な風景に、小さなバツタを取り合わせたところ
が上手い。

※紀久男・季重なりにならないかと採りませんでしたが無何でしょうか。

秋夕焼ゴルフボールの抛物線

孤舟

紀久男・こちらも角川ではゴルフが夏の季語となっているため、季重なり
にならないかと迷いました

やつと聞くせみの鳴き声雨の後

ただしげ

隆さん・今年の夏は梅雨が特別早く明け、蟬の鳴き声が遅かった。蟬の声に
ほっとした夏だった。「雨止みて今年初めて蟬しぐれ」でも。

燃える紅色鮮やかに終戦日

ただしげ

ゆたかさん・燃ゆる紅と終戦日の取り合わせが絶妙です。

【青葉会予定】ご注意ください!! 今月の句会は諸事情により、例外として**第四金曜日**です

令和四年**九月二十三日** (金・祝)

会場：東五反田 パークタワーグランスカイ 2F
時間：十二時〜十六時半

※当日は世話人の紀久男さんは胃のポリプ進行による手術の為ご欠席です。

※ご参加をお考えの方は今回初めての場所です、R 大崎駅近くのパークタワー付属のコミュニティプラザです。この後の【会場】項をご覧ください。

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：九月二十一日(水)中。

◇ご参加のご意向、投句は今井宛 FAX か郵送、或いは星田メールアドレスお願い致します。

【今回の新会場地図】

会場：品川区東五反田2丁目10の1「パークタワーグランスカイ」2F「コミュニティプラザ」
句会：13：00～17：00 (予定)

集合：12：40 JR 山手線五反田駅ホームの大崎寄りの最先端 (上りエスカレーターの手前)

集合時刻に間に合う方は**ご一緒に会場へ**。時間が合わない方は次の「道順」に従いお越しください。

※ただし、マンションの玄関では**孤舟さんのお嬢様に連絡をして玄関扉を開けていただかなくてはなりませんので、左記緊急連絡先 孤舟さん、或いは星田宛必ずご連絡下さい。**

道順：エスカレーターを登り詰めたとところに、JRと池上線の改札口あり。(ビルの4F)
池上線の改札口に入らないようにご注意ください。

JRの改札口を出てエレベーターで1Fへ降ります。(1Fは東急ストアのスーパー)
スーパーを出ると目の前に大通り(317号線)あり。この大通りを右手方向へ進む。

約200メートル先の2つ目の信号で、「はるやま」と「松屋」の間(写真参照)を右折する。道路左側を150メートルほど直進。途中にパンの「MaisonKaysen」スーパー「フーディアム」あり、その隣のビル(目黒川の橋の手前)が会場です。(写真参照) 地図の黄色印が会場のマンションです。

※なおJRを使わずに五反田駅へ来られる方は事前にご連絡ください。状況に応じてご案内致します。

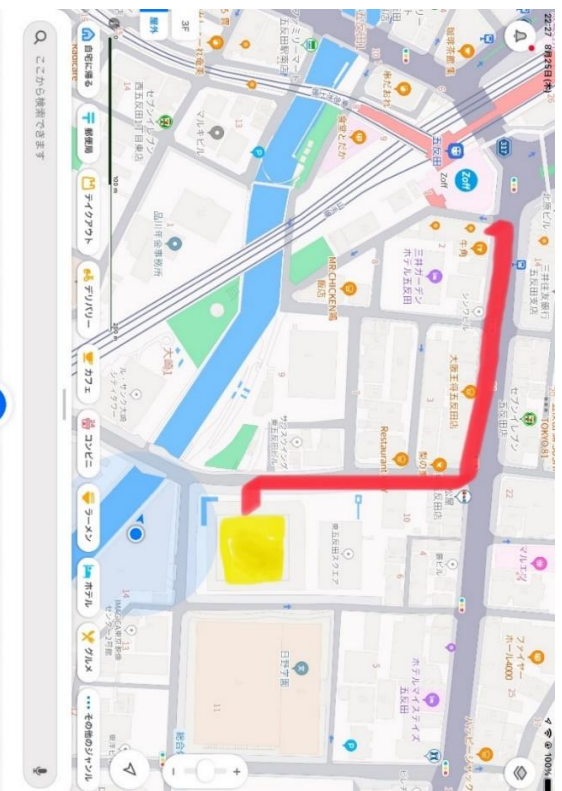
緊急連絡先：川口襄 携帯 090 - 4076 - 5930 / 星田啓子 携帯 080 - 8870 - 8201



「はるやま」と「松屋」の間



パークタワー
グランスカイ
玄関



青葉会報

一、 今回は びんさん始め二名が出席。投句は理論家の康敏さんら二名。選句のみは、それら
おさん、新人の熊谷國男（くにおお）「一葦（いちゐ）」同人。俳人協会新潟支部長）さんら
「〇名。いつもの五郎太さんの捌きでけい子さん、康敏さん、啓子さんが好成績でした。
千恵さんの蓬萊（飛驒）啓子さんの真澄（諏訪）忠彦さんの弥右衛門（会津喜多方）國護
さんの缶ビール、とみ子さんの銘菓、啓子さんのおつまみ等を賞味しつつ丸紅の日経広告
（七月、八月）と盛雄さん推薦の 有本雄美著「もう一人の芭蕉」を回覧しました。

二、 関係者近詠

お昼寝を拒む児昼餉の保母の膝	眞希子	頸椎のコキと鳴る迄二重虹	陽亮
梅雨冷えを正座に封じ校正中	全	明け易し他人の口一面よく見える	全
嬰に添ひて母性も長けよゆすら梅	全	夜の蜘蛛鳴呼黄泉よりの使者の貌	全
弱くとも主の弟子たらん姫女苑	全	蟬穴や脳裏に泛ぶマリウポリ	全
春耕の畑に肩組む道祖伸	弘子	薔薇の棘よりロシアの棘の悪（にく）きこと	全
二階から三階から出る鯉幟	全	巳之助・老太郎らの「車引」	全
ボルゾイの脚もつれさう春堤	全	豪快に編笠飛ばす夏芝居	紀久男
辣薙漬ほどよき頃やカレー煮る	全	猿之助・右近らの「猪八戒」	全
婚礼の出席の丸新樹の夜	全	京劇の殺陣に負けじと夏歌舞伎	全

「森の座」九月号（横澤放川選）

秋暑しいつしか吾も初期の惚け	盛雄	一芸に秀づ人かな涼し眉	健介
太陽の塔へ残暑お見舞い申し上ぐ	全	籠り居て読むは清張戻り梅雨	全
信義なき露国の動きうそ寒し	全	夜も残暑戦中歌謡高唱す	紀久男
村の名は昔のままの地藏盆	全	磯釣りの魚信少なき残暑かな	全
老ひてなほ冴へし味覚や山椒の実	全	初秋や散髪すませ句の席へ	全
		実紫ついはむ鳥の可愛くて	全

「きさらぎ句会」八月

三、 孤舟選者近詠 —— 「爽樹」誌9月号

どの子にも無限の未来揚雲雀
 分校はみんなが主役島の春
 あいの風島の膨らむ大漁旗
 「シャツに大き鯨や夏来る
 朴咲いて花の数だけ大志あり

令和四年九月 十一日

紀久男 記